

ジャクソン・ポロックにおける無意識—象形文字的図像をめぐる—

寛菜奈子 (京都大学)

ジャクソン・ポロック(1912-56)は、第二次世界大戦後のアメリカ合衆国において全盛を迎えた抽象表現主義の代表的作家である。ポロックは1948年頃から、筆や棒から絵具を滴らせて描く「ポアリング」という技法を用いて、カンヴァス全体を滴る線の交錯で覆い尽くす絵画を描いた。そうした一連の作品は「オールオーバー」と称され、ポロックの代表作とされる。しかし、具象的な表現を一切排した画面構成故に、これらの絵画が一体何を表象しているかについて現在までに多くの議論がなされてきた。

ポロックについての数多くの議論の中で、特に中心とされたのは「無意識」という概念である。無意識については、20世紀初頭にジークムント・フロイトが綿密な考察を施し、様々な領域へ影響を与えた。芸術の領域も例外ではなく、1924年には無意識を制作の源泉とするシュルレアリスムが旗揚げされるに至る。ポロックはこのシュルレアリスムの動向に深く影響を受けた作家であり、また自ら「我々は皆フロイトに影響されている」「無意識から描くとき、形象は必ず現れてくる」と語ることで、自身の制作の源に無意識が深く関与していることを示唆している。

本発表はポロックが作品を制作する過程で、無意識をどのように捉え表象していったのかを新たに考察し直すものである。ロザリンド・クラウスに代表されるように、ポロックの作品と無意識を関連づける考察は多くなされている。しかし、いずれの研究においても無意識の概念定義が不十分であった。そこで発表者は、フロイトの考察に拠って無意識を記憶の一形態として明確に定義することから始める。そして、無意識の視覚的形象化はいかなる形において可能であるかについて考察を行う。そこで重要な形象となるのが、ポロックが初期から晩年に至るまで一貫して描き続けた象形文字的図像である。

フロイトは、無意識が作用する場としての「夢」という現象に着目し、その視覚的形象がどのように形成されるかについて考察を行った。そこでフロイトは、夢に現れる読み解けない象形文字的図像の異質性に触れ、それは意識による加工を受ける前の無意識的形象ではないかと論及する。これを受け、ジャック・デリダ、ジャック・ラカンの両者は、無意識において文字が、何かを指し示すという性質を剥ぎ取られ、純粋な「物」として扱われると結論する。その上で、デリダはアントナン・アルトーが演劇やデッサンにおいて希求した象形文字的的形象を無意識に由来する形象であるとする。同様にラカンも、日本の書道芸術が文字を「物」として捉えた芸術であると述べている。

近年のポロック研究において、オールオーバー絵画の下地にも象形文字的図像が灑かれていることが明らかとなった。本発表では、上記の三者の考察に拠りながら、ポロックの重要な造形的特色である象形文字的図像もまた、無意識と密接に関連しあって生み出された形象であることを示すことを目的とする。